

推 薦	・誤字、脱字、文体などの乱れが多い。	・せっかくだけ書いた作文なのに、先生から作文が返ってくるのと、赤ペンでたくさん訂正されてくるので、作文を書く自信がない。	◎自己評価 ◎相互評価 ○作品の検査	(1)自作音読による読み返しの習慣を身につけさせる。 (2)となり同士、相互修正させる。 (3)共同推敲により、推敲の仕方を理解させる。 (4)横い方に自信のない言葉は辞書で調べさせる。 (5)書いたものを音声化し、文の乱れ、語い、句読点の誤りなどに気づかせる。
-----	--------------------	--	--------------------------	---

#### 4. 診断と治療を取り入れた作文指導の実際

##### (1) 「短作文」による診断と治療

短作文による治療とは、200字程度の短い作文を児童生徒に書かせることにより、一人一人の児童生徒の作文力の診断・治療に役立てようとするものである。

これは、次の諸点について有効である。

- 取材・構想・記述・推敲などの各指導過程に位置づけ、それぞれの指導の観点に応じた診断・治療ができる。
- 比較的分量が少ないので、児童生徒も取り組みやすい。
- 比較的分量が少ないため、数多くの児童生徒と書かれたものをめぐって面接指導が可能となり、個別化が比較的容易である。
- 指導者側は、すみやかに診断・治療ができ、指導の手を加えられる。

##### ① 目的

- ア 書く機会を多く与え、書くことへの抵抗感をなくし、書くことの日常化・習慣化をはかる。
- イ その時間の学習のねらいを焦点化し、児童生徒に学習課題意識を徹底させる。
- ウ 書く機会を多く与え、反復練習を多くすることによって、作文の方法・技能を習得させる。
- エ 一単位時間内に、取材・構想・記述・推敲・評価を行い、それらを有機的に結びつけて指導の一貫性をはかる。
- オ 机間巡視などをし、それぞれの指導過

程の中で個に応じた指導を行い、個別化をはかる。

カ 評価の観点を明確にし、かつ焦点化して評価を行い、達成が十分でない児童生徒には再指導をする。

キ 診断・治療をすみやかにし、児童生徒の興味・関心のうすれないうちに指導の手を加える。

##### ② 分量、形式、内容

###### ア 分量

200字以内とし、多くとも400字程度とする。

###### イ 形式

課題作文を主とし、自由作文も目的に応じて適宜取り入れる。(課題作文を主に取り入れるわけは、題材決定や取材に時間がはぶけるし、共通意識をもって話し合いができ、相互修正するのも都合がよいからである。)

###### ウ 内容

生活文、記録文、説明文など、年間指導時間に位置づける。

##### ③ 指導上の留意点

###### ア 取材

(ア) いわゆる行事作文だけでなく、身のまわりの事象にも取材させるようにする。

(イ) 学校内のできごとや新聞・テレビなどのニュースも取材させ、児童生徒の興味を喚起させる。

(ウ) 取材カードを用い、「おもしろかったこと」、「不思議に思ったこと」、「感動したこと」などから、題材や主題をさがして選ばせる。

(エ) 題さがしの言葉を与えたり、題さがしの訓練をさせる。

###### イ 構想

(ア) ささまざまな段落構成の型を提示し、自分の主題、内容に合った構成を選ばせる。